

Adam McCauley and Andrea Ruggeri (2020) "Chapter 2: From Questions and Puzzles to Research Project, in Luigi Curini, Robert Franzese eds, *The Sage Handbook of Research Methods in Political Science and International Relations*, Los Angeles, Sage, pp.27-43.

Adam McCauley and Andrea Ruggeri (2020) 「問い・パズルから研究計画へ」 pp. 27-43.

➤ 紹介文

本稿は、政治学・国際関係論に関する定性的・定量的方法論を幅広くカバーした最新の著作、"SAGE Handbook of Research Methods in Political Science and International Relations"に収められている。オックスフォード大学にて反乱や政治的暴力に関する研究を行っている A. McCauley と、同大学にて平和維持、内戦や政治的暴力を研究テーマとする A. Ruggeri の共著論文である。本論文は、政治学・国際関係論が検討対象とするリサーチエスチョンの種類とその設定方法について、図表・リストを用いて考察を行っている。

➤ 導入・概要

- どのような分析視角、哲学、仮定においても、優れた研究計画には、優れたリサーチエスチョンが必要になる。本書では事例研究、統計分析や過程追跡などの政治学の方法に関する幅広い検討を行っているが、それぞれの研究は、「何を研究するのか」という問いかけから始まる。
- 本章は、政治学・国際関係論 (IR) を対象として、リサーチエスチョンをどのように発想し、生み出すことができるのかについて検討し、関連する研究にどのような意義を持つのかを探求する。具体的には、リサーチエスチョンがどこから生じるのか、リサーチエスチョンを設定する際の「柱」、リサーチエスチョンの開発とそのタイプについて順に考察を行う。

➤ リサーチエスチョンはどこから来るか(27-29 頁)

- リサーチエスチョンの設定はあらゆる研究の前提条件となる。しかし政治学・IR の分野では、方法論、理論、歴史分析に関心が集中する一方で、リサーチエスチョンの設定に関する教材はほとんどなかった。
- 問いとは、目に見えない思考プロセスの最終的な結果として生まれる。つまり、古いアイデアと新しいアイデアを結びつける意識下(a mind's work)の作業によって問い・疑問は生じる。

- 研究者は、経済制裁、国際機関、軍事占領、内戦といった題材に着目した際に、自身の関心や問いの起源を説明することが困難な場合がある。本稿は、たとえ関心の起源が不明であっても、質問形成の実践を体系的に把握することができると主張する。例えば先行研究は問いやアイデアの生成について以下の知見を提起している。
 - ☆ Pentland(2014)は、アイデア創出のための社会的文脈の重要性を説明している。特に、自由な発想や知識の生成に大勢の人々が関与できるコミュニティの存在と、その多寡がアイデア創出に影響を与える。
 - ☆ Johnson (2011) は、イノベーション発生の複雑性を研究することで、「世界を変えるようなアイデアは、突然のブレイクスルーとは対照的に、時間をかけて一直感がゆっくりと成長するように- 進展する」ことに同意している。Johnson は、アイデアの生成には、強力なコミュニケーション・プラットフォームの発展や、研究者同士のネットワークの存在が重要であることを示唆している。
- 本稿は、上記した先行研究を踏まえて、質問形成に関わる「文献レビュー」の重要性を指摘する。文献レビューとは、他の学者の主張を確認し、潜在的な原因と結果を探求するための問いの設定を助けるものである。
 - 文献レビューは、上に述べたアイデア生成の哲学を具現化するものである。研究の初期段階は潜在的なパズルの特定に重点を置くことが多く、文献レビューによって問いをより洗練する必要がある。こうした問いの設定作業において、研究者は可能な限り自身の専門分野だけではなく、他の分野（学問、フィクション、映画等）の探究を同時に行うことで、研究上のパズルの発見や問いの設置に関する洞察を得ることができる。

➤ **具体的かつ一般的な研究課題 (29-30 頁)**

- 研究者は、一つについて多くを知りたいのか（ハリネズミ）、それとも多くのことについて少し知りたいのか（キツネ）という、ハリネズミとキツネのジレンマにしばしば直面する。例えば、1952年から1960年にかけてケニアで「マウマウの反乱」がなぜ起きたのかに興味があるのか、もしくはより一般的に内戦がどのように始まるのかといった問題である。
 - こうした問題に対応するには、研究者がどのような疑問に答えることができるか、どの程度包括的な答えを提示できるのか、得られた知見をより広い範囲の事例にどのように適用できるかを定めることが必要となる。

- 学術的アプローチには独創性が重要となるが、すべての研究は既存の学問体系の中に存在している。研究者は、既存の研究の文脈の中で自分の疑問を形成するだけでなく、既存の研究の中に自分の貢献を位置づけなければならない。つまり、研究結果がどのように課題を明らかにし、その知見を正当化するのか、またその研究がどのように政策に関連しているのか、そして研究計画がどこまで実現可能なのかということを説明しなければならない。

➤ リサーチ・クエスチョンの柱 (30-34 頁)

リサーチクエスチョンを設定するための研究上の五つの「柱」がある。具体的には (1) パズル、(2) ギャップ、(3) 現実世界の問題、(4) 実現可能性、(5) テーマに対する情熱である。以下ではそれぞれの項目について検討する。

● パズル

- ほとんどの問いは、説得力のあるパズルから始まる。パズルとは、Gustafsson and Hagström (2018) がいうように、「Y にもかかわらずなぜ X なのか」、「Y にもかかわらず X はどのようにして可能になったのか」の質問に見られるような、それぞれの要素を分離して研究することができる二つの変数を意味する。
 - 重要なのは、上記のパズルは、先行研究を探索することによってのみ発見できるということである。ほとんどのパズルは、先行研究の論証や知見を整理した後に現れ、そこでは論理的な緊張や経験的な矛盾が浮き彫りになってくる。

● ギャップを埋める

- 先行研究に存在するギャップは、新しい研究計画の明確な出発点となる。ギャップとは、従来の理論枠組みや研究デザインにおける前提と、事象との間に確認される差異を意味する。
 - 研究者は、研究内容や関連する研究課題を定義している前提に挑戦することで、研究上の知見を得ることができる。
 - ◇ 例えば、行為者がどのように選好を形成するのか (Moravcsik 1997)、行為者が成果志向の合理性を採用するのか、プロセス志向の合理性を採用するのか (Hirschman 1982) もしくは、既存の研究は物質的なインセンティブ (能力、金銭的側面など) に焦点を当てすぎて、規範、アイデア、感情などのイデオロ

ギ一的側面に関連する重要なダイナミクスを見逃しているかもしれない
(Sanín and Wood 2014; Checkel 1998; Petersen 2002)

● 現実世界の問題

- 意欲的な研究は、しばしば「現実世界の問題」に対応することを研究の目的としている。研究者は、自身の研究課題が社会に影響を及ぼすかどうか、またその研究成果によって何が（あるいは誰が）影響を受けるかを問う必要がある。以下では、「現実世界の問題」に研究が対応する上での論点を示す。
 - 例えば学者による研究が、政策立案者や国会議員、NGO 職員などの非学者 (non-academic) によって、政策への影響、実施戦略、効果や効率などの観点から参照されることがある。
 - こうした学者と政策立案者の関係について IR の分野は多くを学んできた。以下では二つの経験を取り上げる。第一に、研究者が政策への影響を明確にしていれば、政策立案者はその研究を実践に取り入れる傾向がある。第二に、特に著者の研究が現代の政策課題と問題意識を共有している場合、論旨や主張の明確さ、また政策的含意が明示されていないければ、政策立案者が独自の結論を導き出し、研究を誤って利用する可能性がある。
 - ◇ Shalom(2008) では、2003 年のイラク侵攻をめぐって、ブッシュ政権がイラクへの軍事介入を正当化するために民主的平和に関する文献を誤って使用したことに焦点が当てられている。

● 実現可能性

- 実現可能性というトピックは、政治学や IR の持つ重要な関心事項を表している。ここで研究者に問われるのは以下のような質問である。「あなたの新しい研究パズルに対する答えを見つけるために必要なデータや方法はあるのでしょうか？」。
 - どのような手法やデータが最も有用か、またそれらが利用可能かどうかを研究プロセスの早い段階で知ることが困難であり、方法と既存のデータに関する効果的なレビューは研究の重要なステップとなる。

● テーマに対する情熱 (研究を楽しむ)

- 研究計画を進めるには、時間、エネルギー、興味などの機会費用の発生が伴う。したがって、研究計画が自分の意思で選んだものか、他者から提案された（あるいは押し付け

られた) ものかは、重要なポイントになる。

- ・ 研究に対する自分の関心や利害を理解することは、自身の仕事から喜びを得るために重要であり、研究計画を完了するための動機付けに役立つことになる。

➤ リサーチクエスションの開発(34-35 頁)

- 本節では、政治学研究において考えられうるリサーチクエスションの範囲について、リストと共に検討する。このリストはすべてを網羅しているわけではないが、リサーチクエスションを作るための出発点となる。
- ここで、リサーチクエスションは大まかに2つのタイプに分けられる。第一は、説明されるべき主要な現象 (Y、従属変数) に焦点を当てるものである。もう一つは、その Y の変動を説明する要因 (X、独立変数) に焦点を当てるものである。

- ・ **Y とは何か?**

「Y とは何か?」は説明志向の研究において最も直接的な問いである。高度に理論的で、概念化を伴い、この問いかけの後に続く問いに対して有用な類型を提供する可能性が高い。

- ・ **Y はどのように変化したのか?**

この問いは、Y に焦点を当てたまま、概念的な定義を提供しようとするのではなく、Y が時間的・空間的にどのように変化してきたかを追跡するものである。

- ・ **なぜ Y なのか?**

Y の定義から始まり、その定義を維持したままデータ生成プロセスの潜在的な説明を提供するために研究が遂行される。この質問は、メカニズムを精緻化し研究するのに有効となる (Tilly 2001; Hedström and Ylikoski 2010)。

◇ Fearon (1995) は、戦争を対象とした研究において、最も引用されている知見の一つである「戦争の合理的説明(Rationalist Explanations for War)」を主張した。そこでは戦争の概念定義を行った上で、戦争の発生を説明できるものは何かという問いを構築した。問いの基礎となる概念定義を行い、その問いに答えうるメカニズムを探究した Fearon(1995)の研究は、戦争研究の基礎となるものであった。

- ・ **どのような条件において Y か?**

この問いは、「どのような条件のもとで」という古典的なフレーズから始まり、従属変数 Y の変動と独立変数である X の変動の影響について、研究者に考えるよう促すものである。

- ・ **X と Y は共変動するか?、X は Y を引き起こすか?、X は Y にどのような影響を与えるか?**

上記のタイプの問いは、共変関係をより明示的にしようとするものである。ここでは「民主主義国は他の政治体制よりもより豊か(richer)か?」や、「国際機関は協調の要因となるか?」等の問いの様に、形容詞や動詞の選択によってその相関の性質が示唆される。

- ・ **X の Y への影響は Z によって軽減されるのか?、なぜ Y は G や T で変化するか?、なぜ X は T では Y に影響を与え、T-1 では与えないのか?**

この 3 つのタイプの質問は、複雑な階層を提供するものである。これらの質問は、ある結果に対する X の効果が、他の要因 Z を条件とするのか、もしくは Z によって軽減されるかどうかを問うものである。これらの質問は、研究者を X と Y だけの研究にとどまらせないため、研究課題をよりダイナミックで広がりのあるものにする傾向がある。

1. What is Y?	→ What is power?
2. How has Y changed?	→ How has trade increased?
3. Why Y?	→ Why war?
4. Under what conditions Y?	→ Under what conditions peace?
5. Do Y and X co-vary?	→ Do democracy and peace correlate?
6. Does X cause Y?	→ Do international organizations cause cooperation?
7. What is the effect of X on Y?	→ What is the effect of aid on civil war?
8. Is the effect of X on Y mitigated by Z?	→ Is the effect of democracy on war conditional on trade?
9. Why Y varies across G or T?	→ Why level of cooperation varies across regions?
10. Why X affect Y in T but not in T-1?	→ Why alliances influence risk of war differently over time?

➤ **結論**

- 本稿は、研究計画を設計し遂行する上でのリサーチクエスションの設定の重要性とその方法を示した。
- 研究者は、自身の考えや研究の意義を適切に説明・理解するためにも、研究課題や研究計画の目的に関する簡潔な質問を自身に投げかけ、その答えの要点を示すこと重要になる。